

編 集 後 記

平成の年号になって17年目の第1号をお届けできることになりました。本号では原著1編で下部直腸癌について、筋層外浸潤距離が6mm未満の場合には6mm以上に比較して5年生存率が良好であり、多変量解析では①リンパ節転移と②筋層外浸潤距離6mm以上が独立した予後因子であるとの報告であり筋層外浸潤距離の長さを予後因子の面から検討した点が新しい知見であったと思います。

この原著に加えて21編の症例報告と1編の臨床試験が掲載されましたが、いずれもそれぞれに興味深く、教育的な論文であります。こうして出来上がってしまいますと何の事もなかった様に見えますが、ここに到るまでには投稿されてから、上西編集委員長を中心に18人の編集委員と2人の編集幹事(委員兼任)さんの多大な努力と15人の査読専門委員で熱心に査読して、それぞれの著者と何回ものキャッチボールの後に育て上げられた論文の集まりであります。また、事務局の皆様が絶大なる努力と汗の結晶でありますことを著者の皆様も、読者の皆様も御理解頂きながら一編一編を読んで頂ければ、編集に関与した者一同の喜びであります。

さあ、新しい年を迎えて旧年に残した事の継続と改めて新しい事への挑戦に燃えておられることと存じます。私達外科医にとりまして「手術」という完成することのない仕事を持っているという喜びは、常に明日へのエネルギーの源になっていると感じております。今日の手術と同じ手術ではなく、今回は「ここを工夫してみるか」と一人考えながら少しずつ自らの手術の質の向上に努力している小生であります。いつまで経っても完成がありえない手術手技の魅力に取りつかれてもはや35年になりますが、自らの手術が完成したと思った時は進歩しようとする努力を忘れた老兵となった証拠と思い、いつまでも精神的には「若く」そして「燃えてる」外科医をいつまで続けられるか挑戦してみたく思っております。

(山岸 久一)